

奈文研での日々

1987年6月、奈良文化財研究所に入所。発掘調査は先輩諸氏の指導のもと、どうにかついていく。測量だけは細心の注意。平城宮跡の整備では、東院庭園の整備が思い出深いとともに、携わったサイン計画の説明板や路面地図が今も機能しているのが嬉しい。

98～2001年は飛鳥藤原宮跡発掘調査部。その頃、明日香村が酒船石遺跡で亀形石槽等を、橿原考古学研究所が飛鳥京跡苑池を発掘。それらを間近で見られたのは、庭園史研究者として幸運だった。

01年に奈文研独立化にともない新設の文化遺産部遺跡研究室へ。全国の遺跡整備と庭園史の研究。5か月間だけ埋文センターで室長を務めた後、04年3月に文化庁に異動。文化庁での仕事は大変だったが、貴重な経験をさせてもらったことに感謝。

09年に奈文研に戻り、文化遺産部長。管理的な仕事とともに、専門分野の庭園史・遺跡整備の研究。13・14年は、副所長との兼務で都城発掘調査部長(平城)。あらためて現場の楽しさ・厳しさ、若い研究員の意欲を実感。2015年は副所長専任。

振り返ると、いまの私があるのは本当に奈文研のおかげと実感します。深く感謝するとともに、我が国の総合的な文化財研究の中核をなす研究所として、個々の研究員・職員の自覚のもと、奈文研が益々発展していくことを心から期待しています。(副所長 小野 健吉)

七年間の記憶

53歳の年、私は20年以上勤務した京都国立博物館から奈良文化財研究所に異動となった。最初の2年間は都城発掘調査部の考古第一研究室長であったが、奈文研で一番楽しかったのはこの時期のような気がする。当時の平城の室員は和田一之輔さん、城倉正祥さん、国武貞克さんの3名で、翌年、和田さんが文化庁に転出し芝康次郎さんが新室員となった。若くまだ柔軟な好奇心を持つ彼らに、考古資料だけでなく伝世文化財を含めた物質文化の総体についての知識が考古第一の仕事には役立つことを正倉院展の見学等を通じて様々な機会に教え、奈文研職員がほとんど無関心であった近世考古学の面白さ等も伝授したつもりである。また、深澤芳樹さんから引き継いだ第一次大極殿院の学報を、森川実さんや北野智子さんの大変な努力により2011年春に何とか刊行できたことも思い出に残っている。

自分自身の研究では、2011年刊行の京大隊によるパキスタン・ラニガト遺跡の報告書でガンダーラの仏教時代の土器編年を発表したこと、2012年に弥生文化博物館と安土城考古博物館で相次いで開催された銅鐸展の図録に、それまでの研究を纏めて発表したこと等が思い浮かぶ。

60歳、まだ老いる年でもあるまい。やり残した、近世・近代の土器作り関係資料の整理等もある。自分の研究を楽しみ、さらに深めたい。

(埋蔵文化財センター長 難波 洋三)

いつのまにか 時が過ぎ

私が最初に奈良文化財研究所に赴任したのは1996年春、前任地は京都でした。新任地への不安と期待との緊張感の中で、新任挨拶等を考えていたことが今となっては懐かしく思います。あれから20年が過ぎ、西大寺駅周辺の風景も大きく変わりました。そして平城宮跡も。奈文研での仕事は、まず、「何もわからない」「何もできない」から始まりました。それまで文教施設の整備に関わって約20年、建設工事のことを少しは分かっているつもりでしたが、そんな自信は跡形も無く消えてしまいました。まず部材の名前がわからない、意味がわからない、調べようにもその方法すらわからない。図面も描けない、積算もできない、現場監理など出来ようはずもない。そんなとき手を差し伸べてくれたのは先輩職員であり、研究員であり、設計委託者、施工者の人たちでした。そのおかげでそれからは「尋ねること」「知ること」「みること」「経験すること」を繰り返す日々が始まりました。時は、朱雀門、東院庭園復原整備のまっただ中でした。そして復原整備が完了する頃には、もはや木造建築特有の魅力にとらわれていました。過ぎた時の中で、巡り会えた人たち、支え導いてくれた人たちへの感謝、そんな自分を包んでくれた平城宮跡に感謝を込めて。老兵は今しばらく平城宮跡で恩返しの時を過ごします。(研究支援課長 今西 康益)



今西課長・小野副所長・難波センター長(左から)